

書について

高村光太郎

この頃は書道がひどく流行して来て、世の中に悪筆が横行している。なまじつか習った能筆風な無性格の書や、擬態の書や、逆にわざわざ稚拙をたくんだ、ずるいとぼけた書などが随分目につく。

一

絶えて久しい知人からなつかしい手紙をもらったところが、以前知っていたその人の字とは思えないほど古法帖めいた書体に改まっている、うまいけれどもつまらない手紙の字なのに驚くような事も時々ある。しかしこれはその人としての過程の時期であって、やがてはその習字臭を超脱した自己の字にまで抜け出る事だろうと考えてみずから慰めるのが常である。やはり書は習うに越した事はなく、

もともと書というものが人工に起原を發し、伝統の重疊性にその美の大半をかけているものなので、生れたままの自然發生的の書にはどうしても深さが無く、その存在が脆弱ぜいじやくで、甚だ味氣ないものである。

## 二

この生れたままの自然發生的な書というものにもいろいろあつて、生れながらに筆硯ひつけんてき的感覚を多分に持っている人の、或る点まで立派に書格を保有し、無邪氣で、自然で、いい加減な習字先生のよりも遙に優れたものとなる。そういう例は支那人よりも日本人に多く、いつの間にか、性格まる出しの、まねてまねられない、或は奇逸の、或は平明清澄の妙境に進み入り、殊に老年にでもなると、おのずか

ら一種の氣品が備わつて来て、慾も得もない佳い字を書くようになる。そういう佳品を目にするのはたのしいものであるが、さればといつて、此を伝統の骨格を持ち、鍛冶かじの効をつんで嚴然とした規格の地盤に根を張つた逸品の前に持ち出すと、やっぱり免れ難い弱さがあり、浅さがあり、何となく見劣りのするものである。人工から起つたものは何処までも人工の道を究めつくすのが本当であり、それには人工累積の美を突破しなければならぬのである。生れながらに筆硯の感覺を持つてゐる人ですらそうであるから、もともとそういう性来を持たない者の強引の書となると多くは俗臭に墮する傾がある。意地ばかりで出来た字、神経ばかりで出来た字、或は又逆に無神経ばかりで出来た字、ぐうたらばかりで出来た字が生れる。世の中にはなかなかそういう書が幅をきかせている。私などもその一

人であるが、これではならぬと思つてつとめて天下の劇跡に眼を曝すことにしているのである。

### 三

書はもとより造型的のものであるから、その根本原理として造型芸術共通の公理を持つ。比例均衡の制約。筆触の生理的心理的統整。布置構造のメカニズム。感覺的意識伝達としての知性的デフォルマシヨン。すべてそういうものが基礎となつてその上に美が成り立つ。そういうものを無視しては書が存在し得ない。書を究めるという事は造型意識を養うことであり、この世の造型美に眼を開くことである。書が真に分かれれば、絵画も彫刻も建築も分かる筈であり、

文章の構成、生活の機構にもおのずから通じて来ねばならない。書だけ分かつて他のものは分からないというのは分かりかたが浅いに外なるまい。書がその人の人となりを語るということも、その人の人としての分かりかたが書に反映するからであらう。

顔真卿がんしんけいはまったくその書のように人生の造型機構に通達した偉人であり、晩年逆徒李希烈に殺されるのをあらかじ予め知って、しかも従容として運命の迫るのを直視していた其の態度の美が彼の比類無い行草の藁書類こうしゆに歴々と見られる。斯かくの如き書を書くものは正に斯の如き心眼ある人物である。後年の名筆であつてしかも天真さに欠け、一点柔媚じゅうびの色気とエゴイズムのかげとを持つ趙子昂ちやうしの人物などと思ひ比べると尚更はつきり此事がわかる。書を学ぶのはすなわち造型美の最も端的なるものを学ぶ事であり、ただ字がうまくなる勉強だ

けでは決してない。お手本や師伝のままを無神経にくり返してただ  
手際よく毛孔もうくの無いような字を書いているのが世上とうじやうに滔々たる書匠  
である。

#### 四

漢魏六朝の碑碣ひけつの美はまことに深淵のように怖ろしく、又実にゆ  
たかに意匠の妙を尽している。しかし其は筆跡の忠実な翻刻という  
よりも、筆と刀との合作と見るべきものがなかなか多く、当時の石  
工の技能はよほど進んでいたものと見え、石工も亦立派な書家の一  
部であり、丁度日本の浮世絵に於ける木版師のような位置を持って  
いたものであろう。それゆえ、古拓をただ徒いたずらに肉筆で模し、殊に其

の欠磨のあとの感じまで、ぶるぶる書きに書くようになっては却てかえつ俗臭堪えがたいものになる。今日所謂六朝風の書家の多くの書が看板字だけの気品しか持たないのは、もともと模すべからざるものを模し、毛筆の自性を殺してひたすら効果ばかりをねらう態度の卑さから来るのである。そういう書を書くものの書などを見ると、ばかばかしい程無神経な俗書であるのが常である。最も高雅なものから最も低俗なものが生れるのは、仏の側に生臭坊主がいるのと同じ道理だ。かかる古碑碣ひけつの美はただ眼福として朝夕之に親しみ、書の淵源を探る途として之を究めるのがいいのである。

羲之ぎしの書と称せられているものは、なるほど多くの人の言う通り清和醇粹じゅんすいである。偏せず、激せず、大空のようにひろく、のびのびとしていてつつましく、しかもその造型機構の妙は一点一画の歪みにまで行き届いている。書体に独創が多く、その独創が皆普遍性を持つているところを見ると、よほど優れた良識せなを具えていた人物と思われる。右軍の癖というものが考えられず、実に我は法なりという権威と正中性とがある。献之になるともう偏る。恐るべき力量は十分ありながら、父の持つていたような天空海闊てんくうかいかつの氣宇に欠ける。それ以後の百星に至っては、おのおの独自の美つくを創り出していて歴代の壯観ではあるが、それぞれ少しずつ末梢まつしやう的なものを持つている。

## 六

書はあたり前と見えるのがよいと思う。無理と無駄との無いのがいいと思う。力が内にこもっていて騒がないのがいいと思う。悪筆は大抵余計な努力をしている。そんなに力を入れないでいいのにむやみにはねたり、伸ばしたり、ぐるぐる面倒なことをしたりする。良寛のような立派な書をまねて、わざと金釘流に書いてみたりもする。書道興って悪筆天下に満ちるの観があるので自戒のため此を書きつけて置く。



使用書体

欣喜堂 かもめ龍爪M

組版 小澤いずみ

公開 二〇一三年一月一日

書について

底本 「昭和文学全集第4巻」小学館

一九八九（平成元）年四月一日初版第一刷発行

一九九四（平成五）年九月一〇日初版第二刷発行

入力 門田裕志

校正 仙酔ゑびす

二〇〇六年十一月二〇日作成

青空文庫作成ファイル

このファイルは、インターネットの図書館、

青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。

入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。